



## あとがき



このたび編集委員を務めることになりました川瀬と申します。私事ながら、5月20日に第二子となる長男が誕生し、本稿もその日に執筆しております。

生まれたばかりのこの子は、きっと22世紀も生きることになるでしょう。そう考えると、これからの100年で科学技術がどのように発展していくのか、自然と想像が膨らみまます。たとえば、2112年には“ドラえもん”が誕生するとされていますが、生成AIの急速な進展を目の当たりにしていると、あながち空想とも言い切れないように感じられます。

AIはすでに研究の方法や発想にも大きな変化をもたらしつつあり、私たちはいま、AIが提示する新たな「科学的知見」や仮説を、どのように理解し、受け入れ、あるいは批判的に吟味していくべきかという問いに向き合わざるを得なくなりつつあります。人間の直観や経験とは異なる形で導き出される答えを前に、私たち自身の思考や判断が、むしろこれまで以上に重要になりつつあるのではないのでしょうか。

ハンナ・アーレントは、ナチス親衛隊員であったアイヒマンの裁判を通して、「悪の凡庸さ」という概念を提唱しました。それは、強い悪意や狂信によるのではなく、思考を放棄し、システムに盲目的に従った“平凡な人間”が、結果として重大な悪に加担してしまうことへの鋭い警鐘です。思考や判断を他者に委ねてしまう態度が、時として大きな過ちを生むことを、改めて認識する必要があるように思います。

科学の営みにおいてもまた、AIが生み出す「知」をいかに受けとめ、何をもって価値あるものとするのかを見極める批判的視点が、強く求められています。

私が切に願うのは、AIがあらゆる「正解」を提示するような時代にあっても、子どもたちがそれに盲従することなく、自分自身の思考を大切にしながら自らの道を歩んでくれることです。そのような未来の一端に貢献できることを信じ、私自身も研究・教育に邁進してまいりたいと思います。

川瀬 頌一郎 2025年5月

日本原子力学会核データ部会  
核データニュース編集小委員会

合川 正幸 (北大)	岩本 修 (原子力機構)
大塚 直彦 (委員長、IAEA)	川瀬 頌一郎 (九大)
小浦 寛之 (原子力機構)	中村 詔司 (原子力機構)
丸山 修平 (原子力機構)	山野 直樹 (RADONet)